

高等教育推進センター研究推進委員会主催
「平成30年度研究・研修報告会」記録

2018年度前期サバティカル研修報告 「日露領土問題の起源と変容」

報告者：黒岩 幸子（高等教育推進センター）

サバティカルについて

それではサバティカルの報告を始めます。学長に出した実施報告は、みなさんに配布したペーパーのとおりです。裏面には予定を含めた研究成果を書きました。昨年4月から半年間を札幌とペテルブルグで過ごしました。いろいろと移動が多くて、まだ研究を文章化できていないので、アウトプットはこれからです。

最初は、札幌の北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターというところに3カ月ちょっといました。そのセンターで部屋をもらっていろんなことをやったので、今日はその中から今一番、私の関心のあるテーマをざっくり話そうと思います。札幌の後は7月の半ばから2カ月半ペテルブルグに行ってきました。今年はロシアでワールドカップが開催されたせいでビザの取得や入国手続きが面倒だったので、予定を少し遅らせて行きました。

私はモスクワにはよく行くんですが、ペテルブルグに1週間以上滞在したのは今回が初めてでした。とても良い所だったので、ぜひ皆さんにも行ってほしいと思います。観光でも仕事でも、ヨーロッパに行くならついでにちょっと寄ってみてください。今日はペテルブルグの街をお見せしようかとも思ったのですが、それだけでは「サバティカルで何をしてたんだ」と疑われかねないので、別の機会にやらせてください。

私は去年4月から半年間、NHKラジオ「ロシア語講座入門編」を担当しました。その舞台はウラジオストクにしたんですが、次に応用編を担当することになったら、そのときは「ペテルブルグで暮らす」というテーマでやるつもりです。その構想もあるんですが、これは別の機会にします。

今日のテーマについて

ちょっと暗い話で恐縮ですが、先週の12月8日はパールハーバー攻撃の日でしたよね。『週刊金曜日』という雑誌にコラムを書きました（2018年12月7日「太平洋戦争と千島列島」）。これが私の今の関心事なので、後でお読みいただければと思います。それでは、パワーポイントとレジュメに沿って30分くらいでお話します。

私のテーマは、皆さんとは専門が違い過ぎると思ったんですが、今ちょうど、安倍プーチン会談が話題になってますね。安倍さんは、「2島プラスα」あるいは「2島マイナスα」にハードルを下げたので、もしかしたら、ひょうたんから駒で、領土問題解決に進むかもしれません。平和条約締結の見通しが来年6月ぐらいにつくかもしれません。私は、1%ぐらいは可能性があると思ってます。これは戦後の日露関係の画期的な改善というこ

とで期待もしてるんです。私は、安倍さんはまったく評価しないけれど、領土問題だけは応援してます。北方領土問題というのは、専門家と一般の人の知識のギャップがとても大きいと言われています。日本だけでなく、ロシアでもそうです。もっとも、ほとんどの領土問題についてこれは言えることですが。そういう問題でもあるので、これからニュースを見るときに、多少は参考になるようなお話をしたいと思います。

千島列島と北方領土

まず、これは千島列島の古い地図です。ご存じのとおり北海道のすぐそばから連なっています。日米和親条約の翌年の1855年に日露通好条約を結んだ日本とロシアは、得撫（ウルップ）島と択捉島の間に国境線を引きました。その時、樺太はどちらのものでもないという取り決めました。その20年後に、今度は樺太千島交換条約を結んで、カムチャツカ半島と千島列島の北端の間に線を引き直します。千島列島は、それまでは戦争とはまったく無縁の島、先住民だけが住んでいる島でした。

千島は、1930年代に日本軍が行くまでは、戦争とは無縁の地、忘れられたような所でした。要するに、魚がよく取れるので水産業だけが発展して、北海道から押し出された漁民が列島の南の方に住んでいました。真ん中は無人島、北の方は北洋漁業の拠点になって、出稼ぎの島でした。そういう列島だったんです。

それがなぜ今は、南の方を北方領土と呼ぶかご存じですか。以前は南千島と呼んでいました。南千島、中千島、北千島があって、戦時中には南千島守備隊、中千島守備隊、北千島守備隊がいました。陸海軍合わせて10万人ぐらいがずっとここで戦うんです。どこで戦っていたかという、アメリカと戦争していました。

北方領土のことを先に話しておきますね。北方領土の「北方」というのは、日本陸軍の北方軍と関係しています。南方戦線、北方戦線があって、北方軍があり、それは後に第5方面軍になります。北方にいるアメリカとソ連を意識していました。当時、「北方問題」というのは、いかにソ連と戦争してあちらに攻め込むかという問題でした。それで戦後は、ソ連に取られた南樺太と千島を「北方領土」と呼んで、アメリカに取られた沖縄、奄美、小笠原の「南方領土」との対比で使っていたんです。

サンフランシスコ平和条約

日本は1951年のサンフランシスコ平和条約で千島列島を放棄します。その時の日本政府は、千島列島は北の占守（シュムシュ）島から国後島までだと言ってます。ここにちょぼちょぼとある歯舞群島は千島には入らないと。北海道の根室半島に歯舞村というのがあって、歯舞群島はそこに所属していました。だから、北海道の付属島嶼、北海道の一部ということです。色丹島はグレーゾーンなんですが、おまけしてこれも歯舞群島に入れました。色丹は行政区分では南千島に入っていたんですが、地図を見るとこのとおり、歯舞群島の先にあります。歯舞の一環だと考えられなくもないので、この2島、色丹、歯舞を何とか取り戻そうと考えたわけです。それを努力目標にしていました。今、2島にハードルを下げることは、戦後の目標に戻るということで、それほど後退でもないわけです。

ソ連はサンフランシスコ講和会議に参加しましたが、平和条約には調印しないで、怒って帰っちゃいます。中国は、あれだけ日本と戦争をしたのにこの会議には呼ばれていませ

ん。それで、日本は片面講和をやったのです。

日ソ国交回復交渉

ソ連とは平和条約を結んでいませんから、1955年から1956年にかけて改めて平和条約のための日ソ交渉が開かれます。すると、その交渉中になんとフルシチョフが2島を返すと、引き渡すと言ってきたんです。そこで、日本はハードルをあと2つ上げます。本当は日本も2島で妥結したかったんだけど、そのころはまだ沖縄は戻っていませんでした。専門家の間では「ダレスの恫喝」と呼ばれていますが、アメリカのダレス国務長官が、「もし日本がこのまま妥協して、ソ連と平和条約を結んだら沖縄は返さない」と脅したんです。

でも、それだけが妥結できなかった原因ではありません。1955年というのは、日本の55年体制ができた年です。自由党、民主党が一緒になりますが、自由党の吉田茂の勢力が強かった。吉田茂は、ソ連とそうやって講和するのは早い、時期尚早だという反対意見を持っていました。それで与党内で揉めて、結局、平和条約は結ばずに日ソ共同声明という形で国交回復しました。共同声明には、「平和条約を結んだ後に色丹・歯舞を引き渡す」とあります。これが今、浮上してきたわけです。

日本政府のロジック転換

日ソ共同声明は、日ソ両国にとって非常に不都合なものになりました。日本は大きな2島、択捉、国後を諦めることになるかもしれないし、ソ連は色丹・歯舞を引き渡すことになる。どんなにしょぼい島でも領土を引き渡すというのは大変な譲歩です。お互いに都合が悪いので冷戦期はずっと黙っていたのですが、本当に解決可能になった今、また浮上してきたということです。

ところで日本は、日ソ交渉の途中から、「サンフランシスコ平和条約で放棄した千島列島に択捉・国後は含まれない」、つまり、「千島列島に南千島は含まれない」と主張し始めます。択捉・国後はもともと千島列島に入らないというロジックを、まあ屁理屈というか珍説を言い出すわけです。

そこで、論理矛盾を解決するために「南千島」の代わりに「北方領土」と呼ぶようになるんです。1964年に事務次官通達が出て、「南千島」の使用が禁止されます。すべての公文書から「南千島」という言葉が消えます。教科書も含めて今はすべて「北方領土」です。根室の人たちも南千島を返してほしいから、おかみの言うことを聞けばいいと思ったわけです。国と足並みを合わせれば、もっと全国的な国民運動になっていくかもしれないと思って、「南千島」をやめて「北方領土」にしたのです。

当時の日本人は誰も千島なんて知らなかったし、興味もなかったし。「北方領土」は、日本人のロシア嫌いもあって全国に浸透し過ぎちゃいました。「北方領土は日本の固有の領土です」というスローガンがみんなにすんと受け入れられました。戦争が終わってから乗り込んできたソ連が許せないという気持ちと、北方領土返還というのがマッチしました。今それをなぜ2島に後退させるのかという疑問もあります。だから今、日本政府は自分たちがつくった神話に逆に縛られているわけです。

日米戦争と日ソ戦争

日本人は、終戦後にソ連が千島を占領したと言っています。でも、日本が8月15日を終戦記念日にしているのは、とても変なんです。というのは、千島では8月18日から23日まで戦闘が続いていたからです。大本営が停戦命令を出さなかったので、日本軍は必死で戦ったんです。もっと早く停戦命令を出していればよかったのに。

また、ソ連も変なんです。白旗を上げて進駐軍として来ればよかったのに。終戦時の千島列島には5万人ぐらいの日本軍がいましたが、ソ連軍と戦ったのは北千島の数千人だけです。その後は抵抗しないで投降して、全員がソ連に抑留されました。北千島の日本軍が最後まで戦っていたら、ソ連軍を全滅させていたかもしれません。北千島の日本軍は、まだ全然戦闘していない、陸戦をやっていない、ぴかぴかの軍隊でしたから。

ミッドウェー海戦で負け、ガダルカナルで負け、日本の首脳部は1943年ぐらいから日本の敗戦をわかっていました。でも、陸軍が「本土決戦で一発やってから負けたい」と粘ったんです。それで何をしたかという、日本の首脳部はよりによってソ連に和平の仲介を頼もうと工作するんです。

実は、米ソの間ではずっと前から話がついていました。アメリカは、ソ連がドイツとの戦争を終えたら、対日参戦してくれと言って、アメとして千島列島をやると約束していたんです。ヤルタ協定を結んで、他にも満州の権益とか外蒙古の維持とか、いろんなものをやるという話がついていたわけです。

ソ連と戦っていたドイツも、日本に早く対ソ戦を始めるよう求めていました。同盟国の日本が東側からソ連に攻め込んでほしいと言っていたのです。結局、日本は戦局を読み違えたわけです。ソ連が攻めてくると思っていたけれど、8月に来るとは思わなかった、秋以降だと考えていたのです。でも、ソ連が対日戦の準備をしているという情報は早くから日本もつかんでいたんですよ。

日本人とロシア人の戦争観

普通の日本国民はソ連が攻めてくるなんて、まったく知らなかった。安全だと思って樺太に疎開した人たちもいました。日ソ戦が始まったとき、樺太の日本人の中には、日本がソ連に宣戦布告したのかなと思った人もいたそうです。樺太も全部、ソ連に取られて、日本軍は抑留されました。

日本の首脳部の不手際というか、失敗を日本の国民は知らなかった。日ソ中立条約は友好と信頼に基づいたものではなくて、最初からお互いに破る気満々で便宜的に結んだものだとは知らなかった。それで、戦後に日本人が許せないと思ったのはソ連です。この日本国民の理解に都合よく乗って、口をつぐんだのが、日本の戦争指導者たちです。だから、まったく自己批判をしていませんよね。皇軍は天皇陛下のための軍隊だから、邦人保護はできないというなら、それはそれで結構だけれども、天皇陛下の領土を取られてしまっただけなら顔というのはおかしいですね。日本の本土だった樺太千島は全部を取り戻さなくちゃいけないはず。腹一つ切らずに偉い人たちが生き残ったというのは問題です。

では、ロシア側は何と言っているかということ、「サハリン、クリルの解放」と教科書に書いています。自分たちが解放したと言ってます。ベルリンも占領じゃなくて解放と言ってます。何かから解放したかということ、それは、日本の軍国主義から解放したという。冗談じゃ

ないですね。色丹島や齒舞諸島は、それまでほとんど、ロシア人は上陸したことも、見たこともなかったはずです。

国際法がどうか、歴史がどうかというのは、みんなが抱いているナショナリズムを前にしては、ほとんど無力ですよ。中国の尖閣もそうだし、韓国の竹島もそうだし。歴史や国際法に沿っていくら説明しても、聞く人はあまりいません。今、どんな本が売れているかという、百田尚樹って知ってます？ 彼の『日本国紀』は出した途端に30万部売れたそうです。何が書いてあるかという、南京虐殺はやっていないとか、日本は侵略したんじゃないくて、それなりの正当性があったとか。もう30年ぐらい前に全て否定されたような話です。でも、そんな本がまた売れるというのは、「歴史学の世界」の授業でも言うのですが、やっぱり人間は歴史には学べないということでしょうか。国民が知りたい歴史を待っていて、たとえば『坂の上の雲』だとか、その他の昔の話をぶり返しても、やっぱりそういうのを聞きたい人たちがいて、本が売れるということでしょうか。じゃあ歴史とか私たちがやっていることは何なんだと思うんですが。まあそれはずっと先のために、今聞いてもらえなくても、きちんと文章化して残しておくことだろうと、そういうふうを考えているところです。

千島の戦争と占領

もうちょっといいですか。千島でどんな戦争をしたのかをお話しします。日本軍は初めに、アメリカ領アリューシャン列島の西部にあるアッツ島とキスカ島を占領するんですが、すぐにアメリカに奪還されます。取り返したアメリカは、アッツ島に物量作戦であつという間に飛行場をつくって、そこからどんどん千島の日本軍を爆撃します。日本軍には兵器も物資ももうほとんどなかったんですが、アメリカは高性能の飛行機や潜水艦を持っていました。

アメリカとソ連は共同作戦で千島を占領します。アリューシャン列島のアラスカに近い所にダッチハーバーがあります。その近くにコールドベイというところがあって、そこには Russian and American Bureau が置かれました。アメリカはソ連をすごく援助しているんです。コールドベイでは、ソ連軍の将兵12,000人がアメリカ軍のトレーニングを受けました。最後にソ連軍が千島を占領するときには、アメリカは高性能の船舶十数隻をソ連に貸与しています。船は、コールドベイからカムチャツカ半島のペトロパブロフスクに持ってきて、そのアメリカの船を使ってソ連軍は占領したのです。そういうことは、すっかり忘れられていますけれど。

最近、根室振興局が、米ソ共同作戦による千島占領の企画展を開いたら、北海道の人たちもすごく驚いていたそうです。米ソ共同作戦のことは、日本だけでなく、アメリカやソ連でも知られていません。米ソが戦争で協力したということは、冷戦期にはアメリカにとってもソ連にとっても非常に都合の悪い事実だったからです。

こういう資料はワシントンにある大きな公文書館、ナラ（NARA, National Archives and Records Administration）にあります。私は入ったことはないんですが、共同研究のグループにそのアーカイブに強い人がいて、この夏にNARAへ行ったら地図とか写真とか、全部撮影してきたのを見せてくれたんです。ソ連のグロムイコが Russian and American Bureau に来た時の写真もありました。他にも、ソ連の駐米大使夫人がアメリカ人たちと

仲良く食事してるとか、ソ連とアメリカの軍人たちが記念写真を撮ってるとか、ダンスパーティーとか。いろんな写真がばっちりありました。アメリカ軍は日本軍よりもずっと立派な千島の地図を持っていたこともわかりました。

ずっと文書館に埋もれていた資料や写真です。今、私たちの共同研究グループは、総合的な日ソ戦争の研究をまとめようとしています。3年後ぐらいには本が出ると思います。

戦争記憶と戦後処理の問題

戦争記憶の問題に触れておこうと思います。日本は、あった戦争をなかったと言い張っています。千島で米軍とずいぶんと戦っていたのに。それで、ソ連のほうは、日本との戦争は北千島の占守島でほんの数日やっただけなんですけど、自分たちは戦争で千島（クリル）を取った、戦争の結果だと言ってます。つまり、日本はあった戦争をなかったという、ソ連はなかった戦争があったという、ねじれ現象です。

日露領土問題の解決が難しいのは、第二次世界大戦の戦後処理の途中で、冷戦という第三次世界大戦が始まってしまったからです。第二次世界大戦の戦後処理だけならば、そう難しくなかったかもしれません。でも今、日本とロシアがやるのは二重の戦後処理、つまり、第二次世界大戦と冷戦の戦後処理をやらなくちゃいけない。この二つの世界大戦の間に敵・味方の関係が変わったわけです。日米は戦争していたけれども、その後の冷戦では、ソ連が日米の天敵になってしまった。同盟を組んでいたアメリカとソ連が対立するようになった。敵・味方の関係が変わった中で二重の戦後処理をどうするか。そのうえ、アメリカの大統領にあんな人が出てきてるし、アメリカを無視しては解決できないし。いったいどうなるかと思ってるんです。ちょっといかれた人同士でむちゃくちゃにやるかな、訳がわからずにやってくれるかなとも思うわけです。

最後に、いくつか写真をお見せします。これは、北海道立文書館にある『千島及離島ソ連軍進駐状況綴』という簿冊の表紙です。「千島及離島」というのは千島と歯舞群島のことです。歯舞群島は、北海道の歯舞村に属する「離島」だったのです。歯舞群島以外の島々は、すべて千島なんだという証拠でもあるわけです。

これは国後島で、サバティカル期間中ではなくて、もっと前に行ったときに撮った写真です。ここに「Slava geroyam」と書かれているのは、「英雄たちに栄光あれ」という意味です。戦争記念碑なんです。この赤い星はソ連赤軍のシンボルです。台座には、見えにくいですが「1941～1945」と書いてあります。こういう碑を見てロシア人が何を連想するかというと、ここで戦闘があったということです。ロシアでは、第二次世界大戦は「大祖国戦争」と呼ばれて、愛国教育の基盤になっています。中国も戦争を愛国教育に使っていますね。この碑を見れば国後島で戦争があった、あるいは国後島出身のロシア人が戦争で死んだと、そういうことを連想させる碑なんです。千島を占領する前は、ロシア人はほとんど来たことのない国後島にこんな碑があるんですよ。そして、日本が降伏文書に調印した9月2日を「大戦終結の日」として、大きなパレードをやったりイベントをやるんです。子どもたちには当然、国後島は自分たちの祖先が血を流して守ってくれた領土だと刷り込まれるわけです。

これに対して日本はどうかというと、これは、納沙布岬にある「四島のかけ橋」というアーチ型の記念碑です。です。ここに「祈りの火」がともっていて、手前側から納沙布岬

の方を見ると、晴れた日には北方領土が見えるんです。その北方領土が帰ってくる日を祈念するシンボルです。戦争などしていないのに、ソ連が後から入ってきて取ってしまったと思わせるものです。でも本当は、アメリカの潜水艦が根室辺りまで来て、日本軍は最後はほとんど応戦できなかったのが、浮上して民間船を銃撃したりしています。いっぱい人も死んでいます。千島海域の海没死者は約3万人いると言われているのに、それを想起させるものは何もないのです。平和な島にソ連が土足で踏み込んできたというイメージをつくりだしているわけです。

北方領土の写真とイメージ

もう少し写真をお見せします。これは、国後島の村はずれにソ連の戦車が放置してあったので撮りました。こういうものがポロっとあるんです。ここで戦争をしたと思わせるためかと思ったら、そうではなくて、防衛用に古い戦車を埋めて使っていた時代のものだそうです。これは、国後にはロシア人がどんどん増えています。きれいな幼稚園もあるし。これは、以前話題になったムネオハウス、あれですよ。それとこれは、なぜかレーニンの生首みたいな記念碑も撤去されずにちゃんと置いてあります。

これは何だかわかりますか。こちらがサハリン、これが千島列島です。これは何かというと、サハリン州の旗なんです。普通はヨーロッパではこういう旗は作らないですよ。最初に見たときは、何だ青地に白いシミみたいなものがある布は、と思いました。確か、1997年に州旗をこれに変更したんです。日本の北方領土返還運動が向こうに伝わって、そのカウンターというか、絶対に日本に渡さないというシンボルです。サハリン島と千島列島を寄せて、サハリン州の結束を表しています。方角がおかしいし、北海道が消えているし、島の位置も変なんですよ。返還しないという意思表示ですね。今サハリンでは、北方領土、彼らは南クリルと呼びますが、それを日本に引き渡しはいけないという署名運動が始まっています。厳しいですね。島が戻ってくるとして、2島だけなら、旗のこの部分をちょっと消せば気がつかないかもしれません。4島を消すのは無理じゃないかという気もします。

一方、日本はどうかというと、これが何かわかりますか？ 外務省が出している読本の表紙です。『北方領土読本～北方領土問題の正しい知識～』。北海道、歯舞、色丹、国後、択捉が載っています。日本には陸上の国境線がないので、こんなに北海道に近い島が外国だなんてあり得ない、こんなに近い島を取られた、と思ってしまいます。

でも、択捉島の先の千島列島はどうなってるんでしょう。こちらは、黒部市に行って講演したときに、「こんなTシャツを作りましたから、使ってください」ともらったものです。択捉の北の千島列島はどうしたんでしょう。得撫島から先はすっかり消え落ちています。日本の場合は視野狭窄に陥っているというか、得撫から先のことはすっかり忘れています。ロシアはロシアで勝手にああいう旗を作って。こういうもの前で研究者ができることというのは非常に弱いというか、ほとんどないんですね。でも、それを言っておしまいですね。

それで今、20人ぐらいで日ソ戦争について共同研究をやっています。モンゴルも8月10日に対日宣戦布告したって知ってますか？ ソ連の宣戦布告の翌日に。小さな戦いでしかなかったのですが。だから共同研究グループには、モンゴル語ができる人もいます。

それから、中国語はもちろん、朝鮮語も、あと英語も。日ソ戦では満州でも悲惨な事がありました。そういうことを全部、総合的に検証して、きちんと本にしようというのが、この共同研究の目指すところで、その一部が私の今の研究テーマです。以上です。(拍手)

Q & A

進行：研究推進委員会

熊本：非常に興味深い話をありがとうございました。せっかくですので、5分間ぐらい取って質問などをしていただければと思います。こういう機会もあまりないと思いますので、どなたか質問ございましたら。

佐々：一応聞いておきます。

熊本：はい。

佐々：すごく幼稚な質問で申し訳ないんですが、日本人が国後島には入れるんですか。

黒岩：ビザなし交流というのがあって、そのメンバーになれば行けます。だけど、参加できるのは、元島民と返還運動関係者とジャーナリストと決まっています。もし行こうと思うなら、ロシアのビザを取ってサハリンから行けるんですが、一応、閣議了解で日本国民は行かないように要請されてます。ロシアのビザを取るということは、相手の領土だと認めることになるので、1989年に閣議了解が出たのです。その頃、けっこうジャーナリストがこっそり行ってたんです。それで、政府が怒って「行かないように」と言ったんです。でも別に行ったからってペナルティーはないです。だけど、私たちは一応準公務員だから、ばれたらちょっとやばいかもしれない。外務省に呼ばれて叱られたりするかもしれない。でも、もう行ってもいいんじゃないかなと思うんですよね。ばれなければ、いいんだし。私もサハリンに行くのにロシアビザを取ったら、頼みもしないのに、ビザの行き先に色丹と国後が入っていたことがあるんですよ。ビザを使って行ったことはないですけど。でも、こっそりと行ってる人たちはいますよ。

佐々：それは観光とか。

黒岩：観光とか、興味があるとか。でもあちらへ行く船も飛行機もけっこう怖そうですよ。落ちそうな怖い飛行機が飛んでますよ。行こうと思うならご紹介しますけれども。

佐々：はい。では規制はない。

黒岩：島のロシア人が歓迎してくれますよ。

熊本：他には誰かいませんかでしょうか。

渡部：いや、本当に全然分からなくて申し訳ないんですけども。ロシアの学校教育の中では、これはどのようにカリキュラムの中に組み込まれているんですか。

黒岩：日ソ戦争のことは、ロシアでは小さく紹介されるだけです。だいたいロシアで第二次世界大戦というと、独ソ戦、ドイツとのすごい戦いを意味します。私がペテルブルグに滞在していたとき、「あなたの今のテーマは何か」と聞かれて「日ソ戦争」と答えると、「ああ、日露戦争ね」と言われるんです。ペテルブルグの近くにクロンシュタットという軍港があって、そこからバルチック艦隊が日露戦争に出て行ったんです。私が住んでいたアパートのすぐ近くに「ポルト・アルトゥール」(Port Arthur、旅順港)というレストランがありました。ロシア人は、日ソ戦をほとんど知りません。教科書には1945年5月に独ソ戦で勝利した後に、さらに日本と戦争をして日本の軍国主義を潰した、自分たちが勝利したというふうに書いてあります。「サハリンとクリルの解放」というのが彼らの一貫した見方です。サハリンの研究者たちとは、私も交流があります。彼らは必ずしもそういう見方ではなくて、すごく柔軟に考えています。でも、教科書はすべて「解放した」です。

熊本：私は、いいですか。教科書という話が出たのですが、その北方領土に関する日本の教科書の扱いというのが、かつてと現在は違うような気がしています。かつては北方領土は日本固有の云々みたいなことは多少あったかもしれませんが、最近はどうはっきり教科書に書いてあって。

黒岩：「固有の領土」でしょう。

熊本：そう。固有の領土。要するに日本の国土の東端というのは、そこまできているんだという見解を公式的な見解として書いているんですが。

黒岩：公式見解ですね。北方領土返還運動をやっている人たちから、もっと教科書に書けという圧力があるんでしょう。

熊本：運動をやっている人たち。

黒岩：択捉までが日本の領土だとはっきりさせろということでしょう。

熊本：択捉まで。

黒岩：教科書にも「固有の領土」と書けという圧力がありますね。教科書検定では、「日

本の領土」に対して「日本固有の領土」にしろと検定意見が付くようです。

熊本：だから……。

黒岩：竹島と尖閣も「固有の領土」に入ってますね。

熊本：おそらく、検定自体がちょっとかなり……。

黒岩：検定も右巻き*になっている。

熊本：右向きになってきて、要するに、「南京」のことを書くともうそれで駄目になってしまったりとか、採用自体がなくなるという、そういう事態になっているので、教科書の内容も必然的に北方領土が「固有の領土」で常識となっているのですね。

黒岩：日本だけじゃなくて、各国の教科書がみんな右傾化していますね。そういう教科書で育った子どもたちが将来どうなるかということです。そういうところにきています。

熊本：それでは、ありがとうございます。では、もう一度拍手を。(拍手)

付 記

本報告は、2018年12月14日に行われた、高等教育推進センター研究推進委員会企画・運営の「平成30年度研究・研修報告会」におけるサバティカル研修の報告の内容を活字化し、再編集したものである。研究・研修報告会の性質を踏まえて、当日の様子的一端がわかるように、Q&Aについても掲載している。

* (編集注)「右傾化」の柔らかい表現。